

花鳥諷詠

二月号



花鳥諷詠

2月号 (443号)

日本伝統俳句協会

花鳥諷詠®

令和7年2月■第443号 ————— 目次

花鳥諷詠選集	岩岡 中正 …… 2
	藤井 啓子 …… 4
この人の作品	堀江 信彦 …… 7
一頁の鑑賞	真篠みどり …… 8
	大石 靖子 …… 9
卯浪	……………10
虚子研究 『六百五十句』 研究 (60)	……………11
支部だより (北信越支部・関東支部)	
「あらうみ」創刊一千号	井上 泰至 ……18
関東支部大会	……………20
書評	真鍋 貴子 ……22
新刊紹介	……………23
風報	……………24
地区行事開催日程表	……………31
編集後記	……………32

「日本伝統俳句協会」と「花鳥諷詠」は公益社団法人日本伝統俳句協会の登録商標です。

表紙 虚子輯『さしゑ』より「つり」中村不折画

花鳥諷詠選集

岩岡中正選

特選五句

大根引きそのまま呉れし二三本

周南河村よし子

佛飯の粟はみ出してをりにけり

松山篠原みどり

遠き日の師の一語水澄みにけり

姫路上原康子

旨さうな柿の過ぎけり汽車の窓

徳島吉田有子

華やぎて淋しきものに秋の山

神戸玉手のり子

二句短評

一句目——この句、無造作なところが良い。「ホイ」と気軽に呉れた声と動作を同時に掴みとって一句にした。「そのまま呉れし」の中七の率直さと強さ。この無造作の中に、呉れた人の短い言葉と好意が垣間見えて、一寸した物語性もある楽しい一句である。
二句目——「佛飯」に粟を供えた句ならいくらでもあるが、この句、その粟が器を「はみ出してをり」まで詠んだ。確かな写生であり、ふとしたユーモアもある。この大きな粟を通しての、自然や仏恩への感謝もある。

入選六十句

舞殿にしづもる日差し鶺鴒高音 箕面 田村 文代

島半周して秋の日を惜しみけり 松山 渡部美恵子

夕日まだ足許にあり草の花 福岡 津田 富子

山霧の見る間に作りゆく異界 高松 信里由美子

大綿を夫の墓前に見失ふ 八王子 小町谷滋子

行間に迷子となりし夜長かな 山口 椿 壽子

斑鳩も飛鳥も大和柿の秋 八尾 窪田由紀子

酒米は旨し丹波の稲雀 大阪 中本 宙

程々といふが幸せ温め酒 高山 大下 雅子

一条の日差し斜めに初時雨 和歌山 市ノ瀬翔子

青空の真中より来る小鳥かな 浜田 福本 正嚴

村中を巡る駅伝豊の秋 熊本 矢澤 幸乃

脱穀のぬくみの届く今年米 高知 坂本喜代子

無縁墓また増えてゐる墓参かな 徳島 真鍋 万緑

ギターたてかけあり夏炬燃えてをり 香川 福家 市子

青空を翼に載せて鶴来る 太宰府 持永真理子
 茶の花のひそひそ話始まりぬ 諫早 安原さえこ
 再会を喜び秋を惜みけり 小千谷 大矢あきこ
 一本も百本も好き彼岸花 熊本 宗像 和子
 赤い羽根つけてくれたる少女の手 北海道 西澤カズ子
 山羊の眸に空の色ある秋日和 下関 貞包 清子
 電線を鳴らし野分の来たりけり 大阪 山内 蘭彦
 海峡のひかりをまとひ松手入 下関 中村 元代
 太陽の光つるつる秋茄子 岡山 伴 明子
 無言館そこはかとなき秋の声 神戸 平尾 孝子
 しまひにはただ一すぢの落し水 鹿児島 所崎 玲子
 立冬の川面静かに尖りたり 宝塚 生嶋 わこ
 パン焼いて小鳥の声につつまるる 太宰府 川路 泰子
 新米や育ち盛りの大茶碗 四日市 丹羽みどり
 衣ずれのやうな音して柳散る 三木 松本 幸平

冬めくや少し傾く父の句碑 長崎 濱口 星火
 ピッチャーの眉凜々しくて菊日和 東京 大井比呂子
 おとがひに湯気のやさしく冬至粥 長崎 田上 喜和
 淡海へ糸引く雨や翁の忌 神戸 岩水ひとみ
 諸鳥の影引き飛べる窓小春 阿南 田中 栄子
 新米をこぼし一粒づつ拾ふ 西予 末光恵美子
 ガソリンを満タンにして菊日和 倉敷 芳賀 一世
 茶の花や飾らぬ人を懐かしむ 福岡 井上波津子
 茶の花や一日一日を慈しむ 安来 細田 洋子
 原人の血がどんぐりを拾はせし 八代 山下しげ人
 城苑の日の濃きところ帰り花 豊中 室田 妙子
 櫓の火に学会論文下調べ 鹿児島 平山 洋子
 空広く待てば鶴来る万羽来る 吹田 生澤 瑛子
 芭蕉忌や瀬戸航く船のはや灯る 西宮 山谷 彰子
 誰も居ぬ日向があれば日向ぼこ 高松 肥塚 英子

● 藤井啓子選

特選五句

被災地の最後となりし運動会

郡上谷 口 恒子

茶の花のひそひそ話始まりぬ

諫早 安原 さえこ

秋天へ届きさうなる大道芸

高松 彦田 照代

村中を巡る 駅伝豊の秋

熊本 矢澤 幸乃

蔓枯るるとき己が身の丈を知る

伊賀 池本 準一

二句短評

一句目——地震や水害の被災地を立て直すのは並大抵のことではない。住居や仕事の関係で故郷を離れざるを得ない場合がある。学校も児童数が減り、今回が最後の運動会だ。きつとみんな全力で走り、大声で応援したのであろう。一句の奥にある深い思いが切ない。

二句目——十一月の乏しい日の中、ちよつと俯き葉隠れに咲く茶の花。その密やかな様子を花同士がまるでこっそり話をしているようだと描かれた。「ひそひそ話」という擬人化が言い得て妙である。

鉄塔の脚のふんばり刈田なか 防府 藤井 汎水
 ひさびさの家居ごころや石露の花 久留米 矢野 愛子
 手を翳す沖までしづか冬に入る 千葉 駒井ゆきこ
 好天の続く予報に柿を干す 熊本 西村 孝子
 釣りの日々将棋の日々や夫小春 根室 前田 水絵
 狛犬の爪金色に神の留守 室戸 山本 千秋
 新米をよろこぶ五臓六腑かな 熊本 木村佐恵子
 枯芝や犬に立入禁止札 松山 門田 安世
 落柿舎の障子明りにみな菩薩 高松 佐々木宏風
 生涯の花鳥諷詠木の葉髪 摂津 小西 真子
 二日かけ立てたる畝に大根蒔く 高知 松本 美貴
 寄鍋をひとり食ふすぐ食ひ終はる 東京 鹿谷 白月
 夜の白鳥金の羽音を落としゆく 青森 長島 喜美
 学生の十七文字の爽やかに 長門 大谷水環子
 一景に纏め上げたる時雨かな 京都 木村 直子

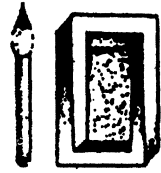
入選六十句

遠くまで転がりたくて木の実丸 高槻 谷本 房子
紀の国は木の国山の粧へる 泉大津 多田羅初美
秋出水地震の禍いまだ癒えざるに 秋田 岩谷 塵外
外されて更に大きな大熊手 稲城 福島テツ子
好天を連れ渡り鳥一陣目 能美 北 重子
写生子の一人一人に冬日かな 今治 横田青天子
砂時計落ちゆく音の秋の声 福岡 島原 仁代
一条の日差し斜めに初時雨 和歌山 市ノ瀬翔子
吊し柿峡の夕日を離さざる 堺 杉山千恵子
青空の真中より来る小鳥かな 浜田 福本 正嚴
脱穀のぬくみの届く今年米 高知 坂本喜代子
青空を翼に載せて鶴来る 太宰府 持永真理子
童話めく森の仲間のきのこ達 高知 岡林知世子
秋晴の真つ只中に旅心 始良 五反田加代
初蟬の次のひとこゑ待ちにけり 川口 櫻井 松翠

波の色抜け出して初鴨となる 大牟田 猿渡 章子
佛飯の栗はみ出してをりにけり 松山 篠原みどり
別れゆくテールランプや霧に消ゆ 倉敷 鴨井 愛子
来る鴨に湖の光を開け放つ 宇部 正司 道子
赴任地は虚子の故郷椿の実 明石 今地千鶴子
金賞と大書する蔵今年酒 神戸 田中 由子
リフト降り五合目よりの花野かな 米原 成宮 伯水
湿らせる紐のきりきり海嵐廻す 高知 駒木 基克
冬空に一筆走る白き雲 神戸 金田八江子
吾も水も雲も過客や秋深む 箕面 須知香代子
天の描く眉美しや夕月夜 松江 小村 四温
新米や育ち盛りの大茶碗 四日市 丹羽みどり
鳴一羽暮色いよいよ深まり来 朝倉 鶴田 ゆき
ふつくらと土鍋で炊きし零余子飯 かほく 澤野 和子
衣ずれのやうな音して柳散る 三木 松本 幸平

雨いつか雪となりきて夜のしじま 札幌 押野 美江
 冬日背に外野守つてをりにけり 西予 三瀬 教世
 崩るるも零るるもあり種を採る 高崎 並木 秋野
 五歳児も家紋を負ひて七五三 高松 宇和川 厚
 一茶忌や地球一周して帰港 尼崎 ほりもとちか
 出来たては常に名句や秋灯下 福岡 棚瀬 弥生
 おとがひに湯気のやさしく冬至粥 長崎 田上 喜和
 老いてこそ冒険の色冬紅葉 刈谷 稲垣三千代
 新米をこぼし一粒づつ拾ふ 西予 末光恵美子
 ふるさとは歪で硬し榎櫃の実 八代 山下さと子
 原人の血がどんぐりを拾はせし 八代 山下しげ人
 初霜や星の欠片の降る朝 石川 水橋眞智子
 空広く待てば鶴来る万羽来る 吹田 生澤 瑛子
 齟齬に齟齬重ね短日なほ短か 京都 山崎 貴子
 稽田の中に駅あり伊賀鉄道 伊賀 西澤与志子

軽やかにミシン踏む窓小鳥来る 西脇 岸本 悦子
 走り根の冬の大地を驚づかみ 三田 吉村 玲子
 献立も決めず大根買つてをり 芦屋 山口 弘子
 オリーブ油効かせ秋刀魚のイタリアン 神戸 宮田マスヨ
 冬支度自分のものは後回し 久留米 吉田いずみ
 稲架を組む山の夕日の消ゆるまで 熊本 吉田 潮
 桐一葉風におくれて落ちにけり 鳥原 原 典子
 バス時刻表は嘘つき雪催ひ 北海道 田尾 良子
 大綿の手に触れさうにして逸れる 高松 池田 裕子
 生涯の花鳥諷詠木の葉髪 摂津 小西 真子
 慣れてきしとはいへ独り温め酒 名古屋 佐藤日出満
 二日かけ立てたる畝に大根蒔く 高知 松本 美貴
 寄鍋をひとり食ふすぐ食ひ終はる 東京 鹿谷 白月
 小春日やふいに一句の降りてくる 神戸 高橋 純子
 夜の白鳥金の羽音を落としゆく 青森 長島 喜美



編集後記

紅梅の蒼は固し不言

虚子

「不言」は、「ものいはず」と読ませる。擬人法を使うと色気が出てくる。まして季題は「紅梅」だ。ただ黙っているのではない。春の心を湛えながら、じつとその時を待っている。満を持して、花を開かせるその日まで。恋の想いに、多くの言葉はかえって邪魔であるのと同様に。蕾が固ければ固いほど、開花の折の「紅梅」の様は、笑顔のようでもあり、その香りは美女の息づかい同様のものとなろう。

●二月二十二日で、虚子生誕百五十年は暮を閉じます。この一年、関連書籍・雑誌特集の刊行も相次ぎました。ついでには、協会の理念でもある「花鳥諷詠」の原義や、その背景について、オンライン講座でお話しし、締めくくりとしたと思います。詳しくは広告ページをご覧ください。

●昨年は能登被災の年でもありました。その苦難を乗り越えるような動きを、地区だよりではご紹介いたします。●顕彰事業も佳境を迎えました。協会賞は先月決定、稲畑汀子賞の応募もお待ちしております。

●「第十八回 虚子生誕記念俳句祭」のご案内です。ぜひご参加ください。

場所 虚子記念文学館

TEL 0797-2111036

日時 令和7年2月16日(日)

午後1時より

内容 募集句表形式・入賞作品発表と講評

岸本尚毅氏講演

要申し込み

参加費 三、〇〇〇円

(井上泰至)

花鳥諷詠 二月号(通巻第四四三号)

定価一、二〇〇円 但し、本代は年会費を含む

年会費一〇、〇〇〇円

令和七年二月一日

発行人 岩岡 中正

発行所 公益社団法人

日本伝統俳句協会

〒151 0073 東京都渋谷区笹塚二丁目八十九

シャンブル笹塚二丁目B一〇一

電話 〇三三四五五五一九一

FAX 〇三三四五四五一九二

郵便振替 口座番号 〇〇一六〇一七一八六八二〇

印刷所 日本ハイコム(株)

〒112 0014 東京都文京区関口一丁目一九二